

## 岐阜キリストン小史(60)－小西マンショのこと①－ 禁教下の最後の司祭

小西マンショという人物をご存じだろうか。天正遣欧使節の伊東マンショとは別人である。実を言えば、私自身は小西マンショの名を知ったのはごく最近のことである。加賀乙彦氏の小説『殉教者』——殉教者とはペトロ岐部のことである——を読んだ際、作中に登場する人物として初めてその存在を知った。

最近、直木賞作家・川越宗一氏の小説『パション』を読み始めたのだが、本作ではこの小西マンショが主人公として描かれている。川越氏の作品を手に取るのは、『大日の使徒』以来であるが、同作はフランシスコ・ザビエルを日本へ導いたヤジローを描いた歴史小説であった。『パション』は『大日の使徒』に先立って書かれた作品であり、川越氏にとって初のキリストン小説である。

小西マンショ（満正）とはどのような人物か。彼は安土桃山から江戸初期という激動の時代を、日本人最後の司祭（神父）として生き抜いたキリストン武士である。曾祖父・小西隆佐（堺の豪商）、祖父・小西行長、母・小西ジュスタ、そしてマンショ自身へと四代にわたり信仰を貫いた小西一族の血を引き、日本キリスト教史において、公然信仰が断たれ、禁教と潜伏の時代が始まる節目を象徴する存在である。

小西家のキリストン信仰は、マンショの曾祖父・隆佐の代に始まった。隆佐は堺の有力商人であり、自治組織を担った会合衆の一人として知られる。会合衆の中にはキリストンが少なくなく、堺は早くから宣教師が往来する国際都市として信仰が広まった地域であった。隆佐は高山右近の父・飛騨守と親交を結び、その交流を通じて宣教師と接触し、一族で洗礼を受け、小西家の信仰の基盤を築いた。

その精神を受け継いだ行長は、豊臣秀吉に仕えて肥後国（熊本県）宇土城主となり、領内に教会を建てて宣教師を保護するなど、代表的なキリストン大名として知られた人物である。行長には、キリストン大名としての姿勢を象徴する逸話がある。文禄・慶長の役では、行長は捕虜となった朝鮮人が宣教師から教えを受けることを許可し、洗礼を望む者を保護したと伝えられる。また、秀吉の伴天連追放令後も密かに宣教師を匿い、領内の信徒を守り続けた。こうした行動は、政治的利害を超えた深い信仰心を示すものとして語られている。

行長の家臣団には多くのキリストンが含まれており、その中には後に天草四郎の父となる益田益田甚兵衛もいたと伝えられる。小西家が関ヶ原後に没落すると、益田家は天草へ移住し、そこで四郎が育つことになる。行長のもとで形成された信仰共同体や家臣団のネットワークは、のちに島原・天草一揆で四郎が指導者として立つ際の宗教的背景の一端を形づくった。

こうした家系の中で、行長の娘ジュスタ（洗礼名）は対馬（長崎県）を治めた宗義智（むねちち）に嫁ぎ、マンショが生まれた。この婚姻は西国の有力大名同士の結びつきを示すものであった。

しかし、1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いがその運命を大きく変える。西軍に属した行長が処刑されると、義智は徳川政権への忠誠を示すため、キリストンであった妻ジュスタを離縁し、小西家との縁を断ち



小西行長像  
(熊本県宇土市・宇土城本丸跡)

切った。その結果、幼いマンショは母ジュエスタとともに家を追われ、キリスト教の拠点であった長崎へ逃れることになった。

1614（慶長 19）年、禁教令が厳しさを増す中でマンショはマカオへ追放される。そこで神学を学び、イエズス会に入会した。ここで出会ったのが、のちに殉教者となるペトロ岐部カスイである。二人は同じ志を抱く学友であり、信仰の同志でもあった。当時のマカオには追放された日本人信徒が多く困窮していたが、マンショと岐部はさらなる研鑽を求め、世界の中心ローマを目指すという壮大な決意を固める。

二人はインドのゴアまで同行したのち、岐部は陸路でペルシャ、エルサレムを経てローマへ向かい、マンショは別の航路を辿った。過酷な旅路を経て 1620 年代にローマで再会し、1627（寛永 4）年、マンショは日本人として初めてサン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂で司祭に叙階される。数年後には岐部も司祭となり、二人はバチカンで「東洋の果てから来た不屈の信仰者」として強い印象を残した。

1632(寛永 9)年、マンショは密かに帰国、薩摩へ入国した。以来、マンショは約 12 年間にわたり、日本各地に潜伏する信徒を訪ね歩いた。その主な役割は、司祭がいなければ執り行うことのできない秘蹟（洗礼や告白）を授けることであった。当初は祖父・小西行長の旧領であった肥後や長崎周辺を中心に活動していたが、激しい弾圧に苦しみ、絶望の中にあった信徒たちのもとへ足を運び、信仰の灯を絶やさないよう励まし続けることが彼の使命であった。

幕府の厳しい監視を逃れるため、彼は農民や商人の姿に身をやつし、主に夜間を利用して移動を繰り返した。信頼できる信徒の家を拠点とし、深夜に少人数で集まって密かに祈りを捧げるという、常に死と隣り合わせの活動であった。取り締まりが強化されるにつれて、活動の場は大坂や京都、さらには監視の届きにくい美濃や飛騨、奥州といった遠方へまで及んだ。1639(寛永 16)年にペトロ岐部カスイが殉教した後は、彼が日本に唯一残された司祭となつた。日本列島を縦断するように各地を巡り続けた彼は、当時の信徒たちにとって文字通り「最後の希望」であったといえる。

しかし 1644(正保元)年、ついに捕らえられた彼は、最も残酷な「穴吊りの刑」により殉教した。彼は、ただ追っ手から逃れるだけの身ではなかった。その命が尽きるまで、禁教下の日本における「最期の司祭」として、信徒たちを導く極めて重要な役割を一人で担い続けたのである。

前置きが長くなつたが、読者の方は、マンショと岐阜にどのような関わりがあるのかと不思議に思われていることだろう。実は、このマンショが飛騨高山の地で「穴吊りの刑」を受けて殉教した、という説がある。1644(正保元)年、日本にいた最後の司祭がどのような最期を迎えたのか。次回はそのことについて詳しく記してみたい。（次回に続く） 

